

## 博士学位論文審査要旨

申請者：神田 恵美子（かんだ・えみこ）

（埼玉県立栗橋北彩高等学校教諭、早稲田大学大学院教育学研究科研究生）

論文題目：高等学校における「聞くこと」の学習指導の研究

—「聞くこと」の有用性を明らかにして思考力を伸ばすために—

申請学位：博士（教育学）

課程内外：課程内

審査員：主査	町田 守弘	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（教育学）
副査	幸田 国広	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（教育学）
副査	堀 誠	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（学術）
副査	桑原 隆	筑波大学名誉教授	博士（教育学）

### 1 論文の目的と方法

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の国語科の三領域の中で、学習者の日常生活に身近な「話すこと・聞くこと」の領域の学習指導の充実が重要な課題となっている。神田恵美子氏は高等学校に勤務する経験を通して、学習者が日常生活においても学校生活においても、言語生活の中で基礎となるのは「話すこと・聞くこと」の中の、とりわけ「聞くこと」であることに着目した。学習指導要領において「話すこと・聞くこと」の指導目標が明記されているものの、「聞くこと」は自然に身に付くもので取り立てて指導することもないという捉え方もあり、特に高等学校では「聞くこと」の能力を伸ばすための授業が活性化していないところに課題を見出した。「高等学校における『聞くこと』の学習指導の研究—『聞くこと』の有用性を明らかにして思考力を伸ばすために—」（以下、「本論文」と称する）の第一の目的は、そのような現状を改善するために、「聞くこと」の有用性を明らかにし、「聞くこと」の学習を活性化させるところにある。神田氏は本論文において、「聞くこと」を「話すこと・聞くこと」の領域から独立させて考えることで、「聞くこと」の能力の育成が思考力の向上に繋がるという課題を見出したうえで、授業実践を通してその課題の解決を目指すことになる。国語科において「聞くこと」の学習がどのように捉えられているのかに注目しつつ、教育現場の実態把握を踏まえ、先行研究や先行実践の成果を取り入れながら、「聞くこと」の能力を向上させるための授業を開発することが第二の目的となる。

それらの目的を達成するために、筆者は以下の三点の方法を取り入れることにした。

- ① 「聞くこと」の指導に関する実態と問題点を明らかにする。
- ② 「聞くこと」の学習の捉えられ方、研究者の主張を整理する。
- ③ 学習者の「聞くこと」の能力を育成する授業を開発する。

2018年版高等学校学習指導要領において国語科の科目が大きく改編されることになったわけだが、必修科目の「現代の国語」の「内容」には「論理の展開を予想しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること」という文言がある。筆者は特に「論理の展開を予想しながら聞き」という点に注目したうえで、予想しながら相手の話を聞いて理解を深めるという学習が重要であると考えた。漫然と聞く場合と意識して聞く場合、さらに予測しながら聞く場合と聞いてから理解する場合では理解

度が異なる。予測しつつ聞き、間違っていたらすぐ修正を加えながら聞き進めることを重視して、高等学校における「聞くこと」の学習活動の改善に取り組んだ。

1999年版高等学校学習指導要領でも「言語活動の充実」が掲げられてきたが、実際には特に「話すこと・聞くこと」の領域においては、充実した活動が展開されてきたとは言い難い状況である。学習指導要領で、「話すこと・聞くこと」の指導目標が明記されているながら、実際の授業では他の領域との関連指導に留まって、「話すこと・聞くこと」の学習が活発に行われていないという現状がある。さらに「聞くこと」の学習は「話すこと」の学習よりも授業で扱われることは少なく、取り立て指導が行われることはきわめて少ない。そこで本論文では特に「聞くこと」の学習に関する問題点を明らかにし、現状を改善する方策を考えた提案を試みることにした。

## 2 論文の構成

本論文はⅢ部構成としてまとめられている。第Ⅰ部では、まず、「聞くこと」の有用性を顕在化させるための課題を確認して、高等学校では「聞くこと」の学習が活性化していないという問題点と現状について、先行研究やアンケートによる調査結果を踏まえながら論述した。続く第Ⅱ部では、「聞くこと」の能力表を作成し、国語リスニング評価テストの評価方法を考察したうえで、具体的な実践の方法を考察した。そして第Ⅲ部では、第Ⅱ部の内容を踏まえて、第Ⅰ部で明らかにした「聞くこと」の有用性に関する課題を追究するための授業実践を紹介している。高等学校において「聞くこと」の能力を向上させるために3年間を見通した授業計画を立て、国語リスニング評価テストと並行して、「聞くこと」に関する取り立て指導を実践したことになる。また、国語科以外の教科や学校行事において、国語の授業で身に付けた「聞くこと」の知識・技能をどのように定着させていくかを論述した。

本論文の目次は、以下の通りである。

### 序章 研究の目的と構成

#### 第1節 研究の目的と意義

#### 第2節 研究の方法と構成

### 第Ⅰ部 高等学校における「聞くこと」の学習の現状と問題点

#### 第1章 「聞くこと」はどのように捉えられてきたのか

##### 第1節 「聞くこと」の捉えられ方の実態

##### 第2節 「聞くこと」を独立的に捉える意義とそれを裏付ける主張

#### 第2章 「聞くこと」の学習が顧みられない現状

##### 第1節 音声言語に関するアンケート結果から見える「聞くこと」の扱い

##### 第2節 「聞くこと」の学習が顧みられていない実態の検証

### 第Ⅱ部 「聞くこと」の能力を測るテストの作成

#### 第3章 「聞くこと」の能力を問うテストとその評価法の検討

##### 第1節 実施されている「聞くこと」のテストの検討

##### 第2節 先行研究のリスニングテスト実施結果と考察

#### 第4章 「聞くこと」の能力の分類と分類表の作成

##### 第1節 「推測・確認・修正」しながら「聞くこと」

##### 第2節 「聞くこと」により理解すること

##### 第3節 「聞くこと」の能力分類表の作成

#### 第5章 「聞くこと」の能力を問うリスニング評価テストの作成

- 第1節 高等学校国語リスニング評価テスト問題作成
- 第2節 リスニング評価テストの結果の分析と個人票
- 第3節 リスニング評価テストの考察

### 第Ⅲ部 思考力を深め社会に出てから役立つ「聞くこと」の能力を高めるための授業実践

#### 第6章 「聞くこと」の3年間を通しての年間計画

- 第1節 「聞くこと」に関する生徒の意識
- 第2節 3年間の「聞くこと」の指導計画表

#### 第7章 国語科における「聞くこと」の能力を高めるための授業実践

- 第1節 能動的に「聞くこと」の能力を高める授業実践
- 第2節 「聞くこと」の能力を高めることで思考力を向上させる授業実践
- 第3節 授業実践の考察と今後の課題

#### 第8章 国語の授業以外での「聞くこと」の学習

- 第1節 他教科や講演会等における「聞くこと」の学習
- 第2節 「総合的な学習の時間」における「聞くこと」の学習
- 第3節 国語の授業以外での「聞くこと」の考察

#### 終章 研究の総括と今後の課題

- 第1節 研究の総括
- 第3節 研究の成果
- 第3節 本研究の課題と展望

おわりに

参考資料

参考文献

### 3 論文の概要

本論文の概要について、以下に章ごとに整理する。

まず序章では研究の目的と意義、および研究の方法と構成について整理した。

第一部第1章の第1節では、「聞くこと」の能力向上が「話すこと」「読むこと」「書くこと」の能力を向上させることに比べて軽視される傾向にあるという問題に言及したうえで、「聞くこと」の学習指導に関する問題点を以下の三点に整理して示した。

- ① 「話すこと・聞くこと」と一括りにされ、「聞くこと」は独立して捉えられていない。
- ② 国語科教員が、「聞くこと」の学習を指導する知識や技術を持っていない。
- ③ 大学入学試験に「聞くこと」に関する問題が存在しない。

そのうえで、「聞くこと」がどのように捉えられてきたのかを考察するために、「聞くこと」を独立的に捉える意義とそれを裏付ける主張を整理した。

第2節では、『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることで、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力育成が思考力の向上に繋がることを顕在化させることができる」という仮説を立てた。先行研究を丹念に分析・考察し、この仮説を裏付けるための主張を抽出して、「①能動的に『聞くこと』が重要であるという主張」と「②『聞くこと』の能力を向上させることが思考力の育成に繋がるという主張」とに分けて、先行研究を発表年代順に整理し、相互の説の関わりを検討した。

第2章の第1節では、高等学校の教育現場における国語科授業の実態を把握するために、1995年と2013年に行った「話すこと・聞くこと」（音声言語）指導に関するアンケート結果から明らかになったことを比較・分析した。その10年に満たない時間差の中で、「話すこと・聞くこと」を授業で取り立てて指導する必要がないとする割合がやや増え、実際に取り組んでいる割合は減少傾向にあることが顕在化する。「話すこと・聞くこと」の音声言語学習に取り組みが困難な要因については、「取り上げる範囲や到達目標が明確でない」「指導方法が確立していない」「評価・評定の仕方が難しい」が、それぞれのアンケートで上位となっており、2013年は「聞くこと」に関する学習に取り組みたいとする割合が半減し、「受験科目にない」という割合が高くなっている事実が確認された。

第2節では、第1節のアンケート結果と関連させて高等学校における「聞くこと」の指導の実態を検証した。特に音声言語教育に関係の深い科目である「国語表現」と「現代語」の指導の実態について考察を加えた。出版された「現代語」と「国語表現」の教科書が現場において十分活用されなかったことも、筆者の調査から指摘できる。こうした指導者の経験不足と新設当時に教育現場の実態に即した「現代語」や「国語表現」の教科書が存在しなかった教学環境の不具合により、「聞くこと」の指導が十分に行われなかったものと思われる。とりわけ「現代語」に関しては、開設する学校も少ないまま、学習指導要領の一期限りで姿を消してしまった。

第Ⅱ部第3章第1節では、「聞く力」を問うテストについて考察し、どのような能力をはかるために、どのようなテストが行われているのかを整理した。それぞれのテストにおいて「聞くこと」の能力の分析方法や、受験者の「聞くこと」の能力の測定の仕方について現状把握の観点から考察した。

第2節では、「国語科聞く力の評価と指導 すぐに使える評価テスト」「母語話者のためのリスニング教材集」を実施した結果から、高校生に対してどのようなテストを行えばよいかを吟味し検証した。単に聞くだけではなく、思考力を駆使する聞き方を必要とする問題も取り入れた。

第4章では、まず「聞くこと」の能力を細分化し、年間指導計画や評価テストに資するべく、先行研究を参考にして「『聞くこと』の能力分類表」を作成した。その際、ホール・ランゲージ理論を参考にし、「聞くこと」を大きく推測・確認・修正の三つの項目に分類した。また発達段階に応じて1年から3年まで段階に分け、「聞くこと」の能力を細分化した。

第5章では「国語のリスニング評価テスト」について論述した。リスニング評価テストの分析方法を明確にし、クラス全体、そして個人において不足している「聞くこと」に関する能力を把握するに足る評価テストの様態を追究した。

第Ⅲ部は、「聞くこと」の能力を高めるための実践編として位置付けた。筆者は高校1年生から3年生までの年間指導計画を立て、「聞くこと」の学習活動を系統立てて実施した。まず第6章では、第4章の「『聞くこと』の能力分類表」と照らし合わせて、「聞くこと」の3年間の学習計画を作成した。

第7章では、第1章で提起した「『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることで、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力育成が思考力の向上に繋がることを顕在化させることができる」という仮説について、実践を通じた検証を試みた。「話すこと」と「聞くこと」は双方が有機的に結び付いた言語活動になるが、「聞くこと」に重点を置いた本論文においては、特に「聞くこと」を中心とした取り立て指導を実践し、その取り組みを論述している。取り立て指導の中核として「能動的に『聞くこと』の能力を身に付ける学習」と、「『聞くこと』によって思考力を深める学習」の二種が扱われている。

第8章では、国語科で身に付けた「聞くこと」の能力を国語科以外の教科や学校行事において定着させることができると考え、「聞くこと」における他教科との関連にも言及した。国語科の授業で身に付けた学力を、他教科や学校行事において横断的に定着させることが可能となった。

終章では研究の成果と課題、展望について整理した。

## 4 論文の成果と課題

本論文の成果は以下の三点にまとめられる。

まず「話すこと・聞くこと」の領域の中で、特に「聞くこと」の学習指導に焦点を当てた追究を深めることによって、「聞くこと」の学習指導に関する実態と問題点を明確にすることができたことである。先行研究が多くはない高等学校を対象校種として取り上げたことも、本論文の独自性を高めることになった。教育現場へのアンケート調査を実施して、指導者の意識の変化に注目しつつ、実態把握を通して「聞くこと」の学習指導の問題点を明らかにした点は本論文の成果と言えよう。

続いて、「聞くこと」の学習の捉えられ方について、主な先行研究の成果を踏まえて整理した点である。特に「聞くこと」の能力を細分化し、先行研究を把握斟酌して「『聞くこと』の能力分類表」を作成した点、特に発達段階に応じて高等学校1年から3年までを段階に分けて、「聞くこと」の能力を細分化して示したことも本論文の成果となった。

そしていま一つ、学習者の「聞くこと」の能力を育成する授業を開発することができた点も、本論文の到達点として、大きな成果と捉えることができる。「聞くこと」の能力分類表と先行研究を基にして、国語リスニングテストを作成し、クラス別・個人別の成績表を提示することによって、「聞くこと」のどのような能力が育成されたのかを明らかにすることができた。また、「話すこと」と「聞くこと」は、双方の言語活動が絡み合ってくるが、筆者は「聞くこと」を中心とした取り立て指導を実践し、その内容をまとめている。本論文の中で設定した仮説を、自身の実践によって検証を試みたうえで、その実践を客観的に記述し分析したこと、さらにこれらの実践を通して、社会に出てから役立つ国語力を身につけることができるように3年間の授業計画を立てたことは、本論文の成果と認められる。

以上のような成果が確認できるものの、今後に向けての課題はある。その一つは筆者の立てた仮説についての考え方である。筆者は本論文の冒頭において、「『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることで、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力育成が思考力の向上に繋がることを顕在化させることができる」という課題を提起した。確かに国語リスニング評価テストでは、「聞くこと」を「話すこと」から切り離して「聞くこと」に特化した学習を実施し、「聞くこと」を独立させた学習が効果的であることが明らかになった。しかし、それと並行して行った授業実践では、「聞くこと」を重点的に扱った授業を展開することによって、「話すこと」や「読むこと」の能力向上にも繋がっていくという方向性も確認できたことから、この点をさらに踏まえた研究が今後は期待される。

さらに二つ目の課題として、評価の問題がある。学習者自身がどのような能力をつけるための学習なのかという点を事前に把握し、学習の後に自らの学習過程と学習成果を実感するための評価を目指す必要がある。特に指導者が自身の授業の修正に活かせるような評価を工夫したものの、実際の授業では演習成果を評価するに留まってしまう場合もある。評価については、個人の評価に留まることなく、所属する高等学校の国語科全体での改善を目指す必要がある。特に高等学校では大学の推薦入試で求められる評定平均が重視されがちであることから、評価や評定の問題の改善に学校全体で取り組んでいくことが重要である。

## 5 総評

本論文は、筆者の神田恵美子氏が長く勤務してきた高等学校において、「聞くこと」の学習指導に特に着目し、先行研究を踏まえつつ実践を通してその有用性を検証した意欲的な研究となっている。2018年に告示された高等学校の学習指導要領において、必履修科目「現代の国語」では「話すこと・聞くこと」に関する指導に20単位から30単位時間程度の配当が求められている。さらに「現代の国語」の「内容」の〔思考力、判断力、表現力等〕の「話すこと・聞くこと」では、「聞くこと」に特化した

指導が設けられている。そのような状況の中で、筆者が本論文において特に「話すこと・聞くこと」という国語科の領域から特に「聞くこと」を重視した研究を展開した点は、今日的で意味のある方向性と見ることができる。

本論文の第2章では、「聞くこと」の学習指導に関する指導者の意識をめぐって、アンケート調査の結果が紹介されている。そこには、多くの高等学校の国語科担当者が「話すこと・聞くこと」の領域の授業、とりわけ「聞くこと」に特化した授業を受けたり扱ったりしたという経験に乏しいという実態が明らかにされている。このような教育現場の現状を踏まえたうえで、高等学校の「聞くこと」の学習指導の必要性に言及した点は説得力がある。

本論文で特に着目できるのは、第Ⅲ部にまとめられた高等学校での具体的な実践である。筆者は高等学校1年生から3年生までの年間指導計画を立案したうえで、「聞くこと」の学習指導を系統的に展開している。その際に第4章で試みた『『聞くこと』の能力分類表』を勘案しつつ、さらに先行研究および先行実践の成果を取り入れた実践が工夫されている。筆者は「聞くこと」の取り立て指導の中枢に「能動的に『聞くこと』の能力を身に付ける学習」、および『『聞くこと』によって思考力を深める学習』の二つの要素を位置付けた実践を展開し、「聞くこと」の有用性を検証した点は一定の成果と見ることができる。

これらの研究成果を確認できる一方で、本論文の課題も何点か指摘することができる。その一つは、多くの先行研究を援用した論述が心がけられているものの、考察を深めて自身の主張に必ずしも有機的に活用されていないような点も見受けられることにある。研究者の思考の整理を行うことはあくまでも必要不可欠な基礎的な作業であることから、それを踏まえたうえで自身の主張をより明確に論述するという方向性を徹底させる必要がある。

いま一つの課題として、本論文の副題にある『『聞くこと』の有用性を明らかにして思考力を伸ばす』という要素について、より重点的に検証をして焦点化を目指した論述を徹底する必要がある。特に「思考力を伸ばす」という点に関してはエビデンスが十分に確立されていない側面もあり、さらなる研究としての深まりが期待される。

「聞くこと」への着眼は、今日的で意味のある観点である。社会的なコミュニケーションにおいても、「聞くこと」は重視されるべき課題と言える。筆者はそのことを十分に認識したうえで「聞くこと」の取り立て指導に関わる具体的な実践を展開しているが、この実践が一つの方略として高等学校の教育現場に浸透されるかどうかは将来に関わる特に重要な課題である。高等学校における「聞くこと」の学習指導について、今後継続した研究と実践の発信が期待されることになる。

以上のような課題が指摘できるものの、本論文全体の研究成果は総合的に十分に評価できるものであり、結論として審査員全員が本論文を博士（教育学）の学位授与にふさわしいものと認め、ここに報告する次第である。

以上